国立民族学博物館
昭和52年10月5日第1号刊行　ISSN0386-2283
平成22年12月1日発行第34巻 第12号通巻第399号

月刊みんぱく

2010 12月号

特集

家畜にみる生き物の多様性

アジアの家畜は人類文明の鏡　池谷 和信
美味しい牛肉の探求と品種の多様性―日本―　万年 英之
家畜の生活から考える多様性―モンゴル―　小長谷 有紀
ユーラシア最古のブタの危機―バングラデシュ―　池谷 和信
「牛舎」と「家畜養護院」―インド―　篠田 隆
生ける文化財の保存と動物園―日本―　小宮 輝之

エッセイ 千字文

私の母川回帰

馬場 章夫（ばんば ふみお）

プロフィール
1939年滋賀県生まれ。ラジオパーソナリティ。大阪の毎日放送などで活躍中。2008年2月からインターネットラジオJOBBBを家族で運営（http://jobbb.sakura.ne.jp/）。おもしろそうなことを求めて興味のおもむくまま国内外をボラボラ歩きまわっている。

ここ二〇年ほど水にはまり、面白い水、不思議な水、うまい水などを探し求めてきました。インドのバラナシではヒンズーの人々と同じように肩まで泥流につかり、味のチェックもしてきました。国内では名水百選（旧環境庁）の取材もほぼ終えようとしています。各地で採水したサンプルの小ビンがたまり大型冷蔵庫におさまりきらず、食器棚から台所の床にまであふれています。

そういえば私と水の関わり合いは出生と同時に始まっていました。生家は琵琶湖のすぐ近くで、敷地内には湧水の井戸が数本と池や幅一メートルほどの川も流れていました。少年時代の遊び場は近所の小田川（おだがわ）という長さ三～四キロメートルの清流でした。素手による魚つかみがメッチャおもしろくてやめられず毎日毎日通い詰めました。喉がかわけば川の水をガブ飲み。亀や蛙や蛇などは気心の知れた親友。家族からも河太郎（かたろう）（カッパ）呼ばわりされるほどの水少年でした。

ここで時空が一九九八年七月二一日にワープします。五九歳の私は大阪府茨木市にある府営水道の村野浄水場におります。ラジオパーソナリティとしてこの浄水場で高度浄水処理された新しい水道水が初送水される様子を取材しているところです。当時の大阪の水道水は原水である淀川の汚れからくるトリハロメタンの問題や塩素臭やカビ臭などでまともに飲めるものではなかったのです。その対策の切り札として登場したのが高度浄水処理というわけです。ボタンが押され送水がはじまります。取材の我々にも冷やされた新水道水がコップで配られました。記者やレポーターたちから「臭くない」「におわない」「うまい」の連発。

当時うまい水の現地取材を一〇年ほど続けていた私は飲み方が違う。コップを両手で水温二〇度ほどになるまであたためてから鼻にかざす。「悪臭なし！」次に慎重に口にふくむ。と、その瞬間舌に高圧電流をかけられたようなショック。何と何故だか突然口の中にあの小田川でガブのみしていた水の味が、水少年の日々の生生しい記憶と共に総天然色で再現されました。小田川から流れ出した微粒子のような物質が琵琶湖から淀川を経てこの二〇〇ccコップにはいった。私は動転しながらサケ、マスの母川回帰に思いをはせました。

それにしても水って本当に面白い。人類を含む生物の未知の部分や謎が水によって解明できるのではないか。もっともっと水を追いかけたい。

月刊 みんぱく
12月号目次

1 エッセイ　千字文
私の母川回帰　馬場 章夫

2 **特集　家畜にみる生き物の多様性**
3 アジアの家畜は人類文明の鏡　池谷 和信
5 美味しい牛肉の探求と品種の多様性－日本－　万年 英之
6 家畜の生活から考える多様性－モンゴル－　小長谷 有紀
7 ユーラシア最古のブタの危機－バングラデシュ－　池谷 和信
8 「牛舎」と「家畜養護院」－インド－　篠田 隆
9 生ける文化財の保存と動物園－日本－　小宮 輝之

10 研究フォーラム
在野の知のひろがりへ
重信 幸彦
12 みんぱく Information

14 地球ミュージアム紀行
三位一体型寺院
スワーミーナーラーヤン・アクシャルダム
山本 達也
15 みんぱく 私の逸品
『夷酋列像図』
佐々木 史郎
16 散策と思索の径
「闇の聖地」で、音に触る
廣瀬 浩二郎
18 多文化をささえる人びと
すべてのひとに文字とことばをふたたび
――夜間中学の今
庄司 博史
20 歳時世相篇
「世界最大」の音楽シーズン
寺田 吉孝
22 フィールドで考える
泥のモスクはだれのもの
伊東 未来
24 次号予告・編集後記

ベンガルデルタにおけるアヒルの飼育。バングラデシュ

特集

家畜にみる生き物の多様性

地球は、わたしたち人間だけのものではない。多様な生き物と共存しなくてはならないという考え方が広まりつつある。しかし、その多様性が述べられるとき、野生動物や植物が注目され、人類文明の結晶ともいわれる家畜がとりあげられることは多くない。日本では一〇万頭を越える食肉用のウシが一頭の種牛にたどりつくなど、遺伝子の固定化がすすむ一方、在来家畜は絶滅の危機にある。わたしたちは、どのような目的で新しい種を創りだし、利用してきたのか。今後、家畜という文化の多様性を保持する必要はあるのか。アジア各地の事例から考えてみたい。

アジアの家畜は人類文明の鏡

池谷和信（いけや かずのぶ）　民博 民族社会研究部

アジアがおもしろい

わたしは、世界中の家畜と人とのかかわり方に関心をもっており、なかでもアジアのそれがもっともおもしろい。世界の家畜の大部分はアジアで家畜化や家禽（かきん）化が生じたといわれている。タイの山村に行くと家鶏はもちろん、山では今でも野鶏を見ることができ、ときには、野鶏が家鶏と交配したり、家鶏が逃げ出して野鶏のようになったりもする。また、アジアでは家畜の種類も多い。スイギュウ、ウシ、ブタ、ニワトリ、アヒル、ウマ、ラクダ、ヒツジ、ヤギ、それにゾウもいる。しかも、地域によって、人と家畜とのかかわり方は多様である。

限りない欲望

まず、日本の家畜をみると、人類の欲望には限りがないと思ってしまう。おいしい牛肉を食べたいという思いから、とことん品種の改良が進んできた。今年、宮崎県内では口蹄疫（こうていえき）の広がりによって二〇万頭以上のウシがとさつされたが、そのなかで一九万頭の子牛の父親となっている一頭の種雄が注目された。これまでこの種牛の子どもを販売して、じつに七〇〇億円にのぼる収益をえたという。そして、宮崎の子牛は、神戸や松阪に運ばれ特殊な環境で飼育されてブランド牛になっていくのだ。そこでは、ビールを飲ませたり、マッサージをした

り、「散歩」もおこなわれている。ここには、まさに「霜降り肉」を食べたいというわたしたちの欲望によって生まれた飼育システムがある。

在来種が危ない

その一方で、アジアには在来種といわれる家畜も少なくない。ブータンやバングラデシュでみられる「ガヤル」とよばれる半野生のウシは、一年中、山のなかに放されておかれる。住民が塩をもっていくと集まってくるという。タイやラオスの在来豚やニワトリは、さまざまな儀礼のときにほふる動物として欠かせない。これら家畜は、各地域において長いあいだにわたり人びととのかかわりのなかで生まれた文化財のようなものである。しかし、最近、人びとの暮らしが変わってきて、絶滅の危機に瀕(ひん)しているものも少なくない。

家畜に注目を

生物多様性の保護というと野生生物が注目されてきた。トキやコウノトリの保護には関心は高いが、在来家畜の保護は野生動物のそれとは別のもののようにみられている。しかし、はたして家畜の「遺伝的多様性」や「文化的多様性」を維持する必要はないのだろうか。現在、わたしたちは、自らの欲望をますます高め、家畜本来の生活まで変えようとしている。まさに、それは家畜を生き物としてみることがあまりなく、肉の切れ身のように「もの」としてとらえているからだ。この点で、インドの「牛舎」や「家畜養護院」、そして日本の動物園で在来家畜の維持がおこなわれている点は注目してよいだろう。家畜と人とのかかわり方は、わたしたちの文化や文明をうつしだす鏡になっているのであるから。

ニワトリの放し飼い。タイ

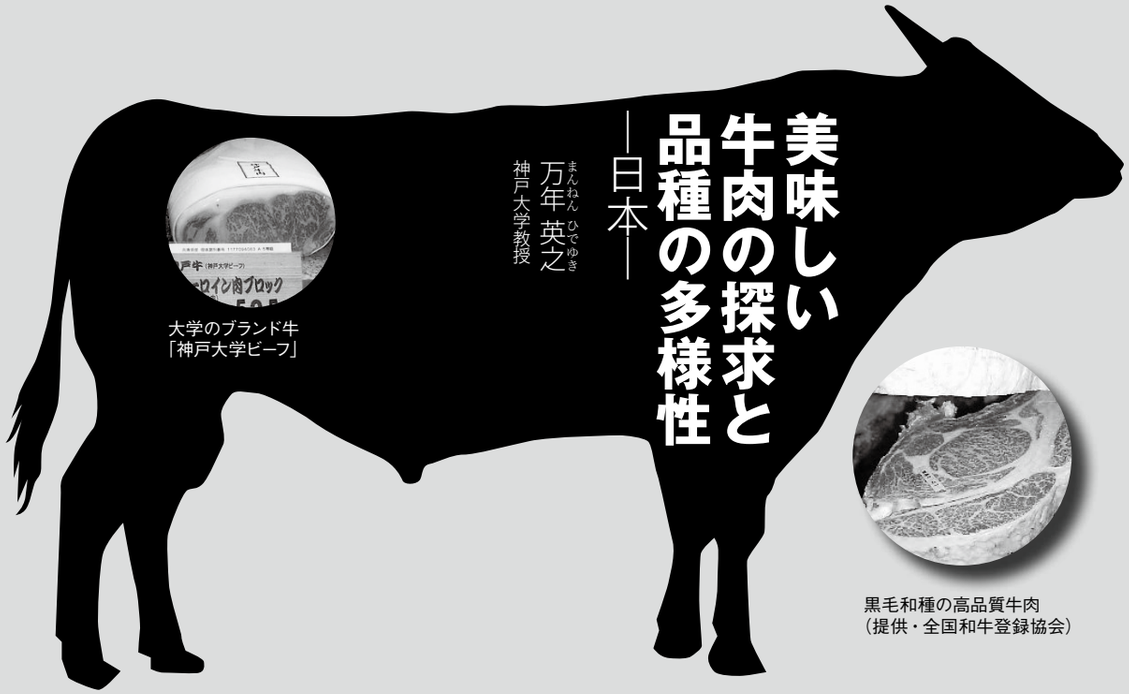
アグー豚。沖縄子どもの国・動物園（撮影・小宮輝之）

野鶏を狩猟する際につかうおとりのニワトリ。タイ

美味しい牛肉の探求と品種の多様性

―日本―

万年(まんねん) 英之(ひでゆき)
神戸大学教授



大学のブランド牛
「神戸大学ビーフ」

黒毛和種の高品質牛肉
（提供・全国和牛登録協会）

農耕の友から、食卓へ

日本で飼育されているおもな家畜は、ウシ、ブタ、ニワトリである。これら家畜のほとんどはヨーロッパを中心に改良された品種で、近年になって日本に導入されたものである。一方、和牛は日本固有の在来品種として認識されている。和牛のなかでも黒毛和種は、牛肉の美味しさから世界中の美食家から垂涎(すいぜん)の的になっている。

ウシの祖先である野生原牛はユーラシア大陸の広範囲で生息していたが、太古の日本にウシは生息していなかった。日本にウシ（和牛の祖先）がやってきたのは、稲作の渡来とときを同じくする約二〇〇〇年前の弥生時代前後であろう。それ以来、農耕の友であった日本在来牛は明治維新後にその役割を徐々に変え、食肉用のウシとして育種改良が進められた結果、世界を代表するウシの一品種となったのである。

固定と変異を両立させる

家畜の改良には二面性がある。ひとつは近親交配であり、もうひとつは多様性の保持である。優れた家畜の品種を作り出すには、優良な形質を見つけ出し、その遺伝子を集団で固定する必要がある。その手段として使われるのが近親交配である。ウシに限らず家畜では、エリート種雄畜を選抜し、その優良遺伝子を集団に広めていく。この種雄畜は全個体の一パーセントに満たない個体にあたり、改良と引き換えに多様性は減少する。一方、さらなる家畜の能力向上のためには、その集団において遺伝子の多様性が保たれている必要があるし、人が求める優良形質は時代によって変化するので、多様性の保持は持続的な家畜育種にとって必須となる。育種改良と多様性の保持のバランスこそが、近代家畜育種学が挑んでいる重要なテーマのひとつである。

その問題を解決する一方策として、形質に関係する遺伝子（変異）を同定し利用することで、改良と多様性保持の両面を成し遂げようとする試みも存在する。例えば、牛肉中の脂肪の性質（脂肪酸の違い）は、牛肉の美味しさに影響する。我々は牛肉の美味しさに影響する遺伝子のいくつかを発見し、それを黒毛和種の改良に役立てている。このような遺伝子の同定は、世界のさまざまな家畜種で進みつつあり、将来はDNA検査による家畜の改良と多様性の保持が両立できるのではないかと期待している。

永続的な繁栄のためには

一方、アジアをはじめとする多くの国々では（我が国も例外ではない）、近代品種との交雑がなくその地域でむかしから飼育されている「在来家畜」が多く存在する。これらは、近代品種と比較するとさまざまな形質で見劣りは避けられない。しかし、在来家畜は長い年月のあいだ、その地域の気候、疾病あるいは食料システムに極めて適応した家畜である。これら在来家畜の多様性と地域特異性を守ることは、人類の永続的な繁栄のための課題なのである。

家畜の生活から考える多様性
―モンゴル―

小長谷有紀（こながやゆき）　民博 民族社会研究部

刈り跡の草をはむウシたち。中国内蒙古（撮影・児玉香菜子）

暮らし方を考える

家畜の多様性といえば、まず品種のことが思い浮かぶにちがいない。たしかに、人類は今なおつづく家畜化の過程で多様な品種を作り出してきた。そのことは、食べるための動物にかぎらない。金魚のように、めでるためにこそ品種が多様に作り出されてきた例もある。一方、こうした品種とは異なる次元で、家畜の多様性の問題として、つね日ごろわたしがモンゴルのフィールドで感じているのは、家畜の暮らしかたに関する多様性である。生活水準あるいは生活の質QOL（Quality of Life）とでもいうべきものの多様性である。

異なる環境のもとで

たとえば、中国内蒙古自治区とりわけオルドス地域で見かける家畜たちは、たいてい痩せていて、いつも立ちながら、草をはんでいる。それに比べると、モンゴル国の家畜は、概して太っており、しばしば寝ころがっている。豊かな草原では、ちょっと食べればすぐに満腹になってしまうかのようだ。かろうじて、メタボにならないですむのは、舎飼いされることなく、自在に動きまわっているからにちがいない。もちろん、モンゴル国でもゴビのように植生にとぼしい地域では、摂食範囲がひろく、摂食時間もながいだろう。また、モンゴル国の場合、たいそう自由で幸せそうに見える家畜たちではあるけれども、大雪のときは容易に行き倒れてしまう。のんびり見えるのはあくまでも穏やかな天候に恵まれた場合であって、厳しい年には草原のあちこちに家畜の死骸（しがい）が散見されることとなる。

昨今では、モンゴル国でもブタを飼う遊牧民も増えてきた。ブタたちは囲いのなかを元気に走りまわり、ときおり柵を飛び越えたりもする。メス豚はとくに、産気づくと柵を飛び越え、森に入り、そこで子どもたちを産み落とす、という。他の地域でもそんな行動が見られるのだろうか。野生のイノシシならそうするのだろうか。

家畜と人の循環

このように、どこでどんな育てられ方をするかによって、当該家畜の一生は大いに異なる。家畜にとってはどんな暮らしが幸せなのだろうか。そもそも家畜にとっての幸せなどは、考える余地などないことだと思われるかもしれない。しかし、ストレスに満ちた生活をしてきた家畜たちを食べ続けて、人の身体が健全でありうるだろうか。今日、有機栽培がもっとも危険になってしまうのも、家畜の飼料が健全でないという悪循環による帰結である。「アニマル・ウェルフェア」という思想は、究極のところ、家畜のためだけでなく、人のためにこそ考えなければならない、現代文明の課題なのである。

参考文献：佐藤衆介著『アニマルウェルフェア――動物の幸せについての科学と倫理』2005 東京大学出版会

日中寝そべるウシたち。モンゴル国テレルジ（撮影・児玉香菜子）

ユーラシア最古のブタの危機
―バングラデシュ―

池谷和信（いけやかずのぶ）　民博 民族社会研究部

遊牧する黒いブタ

二〇〇七年一二月下旬、初めてその群れを見たとき、わたしは自分の眼を疑った。およそ一〇〇頭余りのブタが、町の近くの収穫後の水田で、ヤギやヒツジのように牧夫に伴われ放牧されていたからだ。しかもブタは全体が黒くたてがみがあり、イノシシによく似ている。ブタたちは、お互い一定の距離をあけながら水田に残された稲穂を食べているようであった。キリスト教徒の多いその町では、特にクリスマスに豚肉を好んで食べる。その日にそなえ、群れを町の近くに移動していたのだ。

これが、わたしと遊牧するブタとの最初の出会いである。それまでイスラーム教徒が大部分を占めるバングラデシュのベンガルデルタにおいて、ブタとともに移動する人がいることは聞いてはいたものの、それをいったい誰が、どのように、どこで飼っているのか、謎につつまれていた。遺伝学者は、ユーラシア大陸でもっとも古い形質を残すブタであるという。どうして古いタイプの遺伝子が残されたのか。いつからどのような技術を駆使して、地域の人びとはブタの群れを管理するようになったのであろうか。

白いブタが押し寄せる

ところが、同じ時期にバングラデシュ北部の少数民族マンディ（ガロ）の村に行くと、ブタは単独で飼われていた。しかも、「白色のブタ」が飼育されているのには驚いた。それは、最近、近くに住むアメリカ人宣教師が、インドとの国境近くで購入したものであるという。現在、世界中のブタが多産であり太るのも早い改良品種の「白豚」に変わっているが、このバングラデシュにもこの波がやってきたというのであろうか。しかし、今年の五月に同じ村を再訪したときには、白豚はもはやいなかった。村人にその理由を聞くと食べてみたが肉が柔らかすぎておいしくなかったという。この村の結婚式では一〇頭以上のブタが一度に消費されたりするが、今でも黒豚の人気が高いというのだ。

ブタ自慢はいつまで続く

現在のバングラデシュでは、政府によってつくられた家畜個体数調査はあるが、そこにはウシ、スイギュウ、ヤギなどの項目はあってもブタのものはない。しかし、実際には、数多くのブタがいるということもわかってきた。ブタの頭の形をした当時の彫刻物などから、イスラーム教徒が移動してくる前、つまり、一〇〇〇年以上前のヒンドゥー教の時代からブタが飼育されてきたことは間違いないであろう。牧夫たちは、この黒豚はインフルエンザなどの病気にかかることはない、農地の雑草を食べるのでえさ代がかからない、などブタ自慢することが多い。しかし、グローバル化がさらに進み、多数の白豚が入ってきたときに在来豚を維持できるものであろうか、その対応が注目される。

農村を通過するブタの群れと牧夫の若者。バングラデシュ

「牛舎」と「家畜養護院」―インド―

篠田 隆　大東文化大学教授

ジャガンナート寺院内の「母なる雌牛」図（2010年9月）

アフマダーバード家畜養護院内の絶命寸前の家畜（2007年8月）

崇拝と飼養

インドでは政府の家畜関連施設のほかに、民間非営利団体の施設が家畜の維持再生産や流通に大きくかかわっている。インド人口の多数を占めるヒンドゥー教徒やジャイナ教徒にとっては、在来種雌牛は崇拝の対象となっており、雌牛への奉仕のための「牛舎」（ガウシャーラー）や不要な家畜を「自然死」するまで世話をする「家畜養護院」（パーンジラーポール）が、インド各地に合わせて三〇〇〇施設ほど設置されている。

「牛舎」は宗教団体、教育団体、思想団体などさまざまな非営利団体により運営されている。ミルクなどの産出物は基本的に自家消費される。「牛舎」はこのほか、固有の在来種の維持再生産にも重要な役割を担っている。たとえば、アフマダーバード市近郊にあるジャガンナート寺院の運営する「牛舎」ではグジャラート州の優良種であるカンクレージ種のみを七五〇頭、スワーミーナーラーヤン学校（グジャラートで勢力のあるヒンドゥー教のスワーミーナーラーヤン派が運営する学校）では絶滅の心配されているギール種のみを二〇〇頭飼養している。精選された種牛を置き、家畜品評会で好成績をおさめた雌牛も抱えるなど、種の存続と品質の維持改善を強く意識した飼養がおこなわれている。

殺生をせずにすむように

「家畜養護院」はおもにジャイナ教徒により運営されている。ここには老齢、病気あるいは経済的に不要になったあらゆる家畜が送られてくる。たとえば、アフマダーバード市最大の「家畜養護院」には常時約五〇〇〇頭の家畜（ウシ、スイギュウ、ラクダ、ウマ、ロバ、ヒツジ、ヤギ）が収容されている。「家畜養護院」は、飼養者が家畜の殺生をせずに済むように、多様な家畜を日常的に引き受けるほかに、旱魃時には緊急避難先として有用な家畜を大量に受け入れ優良種の存続にも貢献している。

文化的アイデンティティの象徴

これら非営利家畜施設と一般の人びとは施設の建立時の寄付や運営費用に対する布施をとおして繋がっている。ちなみに、上記の「家畜養護院」では寄付項目が、布施一般、雌牛救済、家畜飼料、その他に分類されており、寄付金の使途を限定できるようになっている。家畜飼料を選択した場合は、施設内の雌牛に直接飼料を与えることができる。雌牛救済への寄付金は、雌牛をとさつ目的で州外に搬出しようとするトラックを強制的に阻止するための費用と、救済した雌牛の受け入れ機関に対する受け入れ助成に充てられる。グジャラート州では雌牛のとさつは禁止されており、「牛舎」や「家畜養護院」は雌牛保護に関する強力な圧力団体として機能している。

インドでは交配種雌牛や雌水牛の頭数が急速に増大しているのに対して、在来種の雌牛数は一九九〇年代以降減少している。この状況に危機感を抱く印僑（在外インド人）のなかには、インド本国の「牛舎」や「家畜養護院」に多額の寄付をおこなう人びとがいる。「母なる雌牛」（ガウ・マーター）は印僑の文化的アイデンティティの象徴にもなっているのである。

生ける文化財の保存と動物園―日本―

小宮輝之　上野動物園園長

一カ月に一品種

地域に根ざした在来家畜が、世界中で一カ月に一品種という急速なペースで絶滅している。このまま家畜の多様性が失われると、将来の食糧生産に影響がでるだろう。これは国連食糧農業機関（FAO）の発した警告である。

特にアジアやアフリカの暑さや乾燥といった気候条件下で何千年も飼われてきた在来家畜が、経済のグローバル化にともない生産性の高い西洋品種に置き換えられ、減少し絶滅するものも出てきた。日本も例外ではなく、日本の風土のなかで日本人の生活を支えてきた在来家畜・家禽はほとんど姿を消している。

トキより少ない

二〇〇八年秋に佐渡でトキの野生復帰がおこなわれた。その際、佐渡髯地鶏保存会の方々にお会いした。佐渡で髯地鶏を飼っているのは七名のお年寄りで、純粋の髯地鶏は五〇羽くらいしか残っていないとのことである。トキはすでに一九〇羽が日本にいるのだから、髯地鶏はトキより数が少ないのが現状だ。

経済性に劣れば生産現場で飼われなくなることは必然である。ならば、文化的な日本の宝として保存しながら、その存在を知ってもらい、遺伝子も残せないだろうか。動物園ではこれまで野生動物の生息域外での保全に力を入れてきた。トキの繁殖技術は動物園で開発したものである。日本在来の家畜や家禽もその保全に動物園が貢献できないだろうか。

四国は愛媛県に残る野間馬は四頭まで数を減らした。四頭のうちの二頭は道後動物園で飼われていたもので、この四頭をもとに現在では一〇〇頭近くまで増えたのである。まさに動物園の生ける文化財としての展示動物が、遺伝資源の保存という一石二鳥の役割を果たした。

二一世紀の子ども動物園

上野動物園の子ども動物園は動物とのふれあいを通じて、命の大切さを実感してもらってきた。六〇周年を迎えた二〇〇八年から少なくなった日本在来の家畜や家禽を集めている。木曽馬、トカラ馬、野間馬、与那国馬、見島牛、口の島牛、トカラ山羊、アグー豚などをご覧いただける。日本在来家畜は小型のものが多く、大型の西洋品種に代わってふれあい動物としての可能性を期待できる。

日本鶏の多様な姿形色合は錦鯉とともに日本が世界に誇る芸術品である。海外からのお客さまに人気のある尾長鶏、それに東天紅、小国、佐渡髯地鶏、鶉尾、尾曳、さまざまな色合いのチャボを放し飼いにしている。二一世紀の子ども動物園は、命の教育とともに日本人の創った生ける文化財の展示、そして日本の遺伝資源の保存を新しい役割に加えた。

木曽馬。上野動物園

口の島牛（左）と見島牛（右）。上野動物園

尾長鶏。上野動物園

研究フォーラム

在野の知のひろがりへ

重信 幸彦
北九州市立大学教授

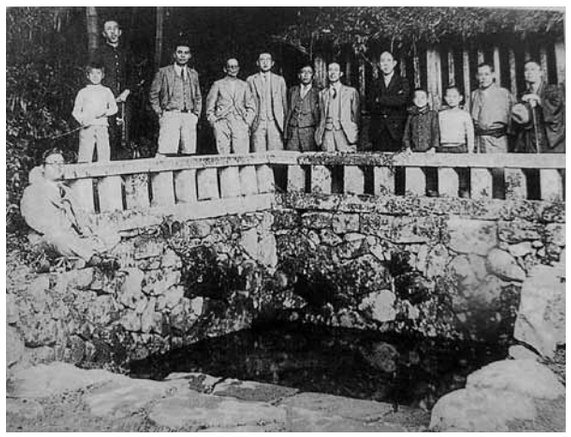
この国の文化人類学や民俗学の揺籃期といわれる1930年代、それらはいずれも、大学や研究所に拠点を置く学問ではなく、在野の知性のゆるやかな参集として展開していた。今年10月に始まったあらたな共同研究「日本におけるネイティブ人類学／民俗学の成立と文化運動」は、そんな当時の在野の知のありようを約2年半にわたり明らかにしていく。

小倉郷土会と「民間伝承の会」

一九三六（昭和一一）年四月二四日の午前中、「小倉郷土会」の会員・川崎英一は、宗教学を学ぶ若い学徒、杉浦健一を案内し、福岡県戸畑市（現・北九州市戸畑区）の鞘ケ谷を訪れた。杉浦健一が「工業地に残された古い姿の農家を見たい」と希望したからであった。

小倉郷土会は、一九三四（昭和九）年ころに、小倉周辺の市井の人びとにより結成された郷土研究の運動体であった。当時、小倉でさまざまな文化運動にかかわっていた耳鼻科医・曽田共助の書斎に、地域の若い衆が自由に出入りし形成された、サロンのような場が拠点となっていた。

一方、杉浦健一は、東京帝国大学大学院で宗教学を専攻し、そのころは、柳田國男が民俗学というあらたな学問をかたちにするために一九三三（昭和八）年から自宅書斎で同好の士を集めて始めた勉強会を起源とする「民間伝承の会」の同人であった。その後、杉浦は、一九三八（昭和一三）年ころから、日本の南洋庁の嘱託としてミクロネシアの調査などに従事し、戦後は、東京大学教養学部にできた文化人類学教室の初代教授になる。五〇歳という若さで亡くなるが、杉浦は、今日のアカデミズムの文化人類学の礎を築いた一人であった。



小倉郊外に出かけた小倉郷土会のメンバー　1935年秋ころ
馬渡博親 編『小倉郷土会のあゆみ』（2002）より転載

知の邂逅の閃き

川崎は、この杉浦との散策について、杉浦の調査の仕方や二人で交わした話題を、小倉郷土会の機関誌『豊前』（第五号）に「杉浦健一氏と歩く」として書き残している。

二人の話は、「自から柳田國男」の話になった。杉浦は、柳田の数多い著作のなかでも、『都市と農村』（一九二九）と『明治大正史世相篇』（一九三一）が、自分にとっては「有益な著作で、民俗学をもっと此の方面に発展させたい」といったという。工業都市、港湾都市そして軍都として急速に都市化しつつあった北九州地域を配慮した杉浦の発言だったのだろうか。川崎英一は、それを印象深く受け止め記している。

都会の商人の論理が農村の日常を包摂し、否応無く変容させていく軋みを、当時の農村疲弊の根源的な原因として見据えたそれらの柳田の仕事が、民俗学のなかで注目されるようになるのは、ようやく一九八〇年代のことである。二人の邂逅に刻まれた知の交歓の閃きは、学史をはるかに先取りしていたのである。

在野の知のひろがり

もちろん、ささやかなエピソードにすぎない。おそらく、当時、日本のそこここで、こうした在野における知の邂逅が芽吹いていたに違いない。各地に郷土研究の団体が簇生していたからだ。

柳田國男たちは、こうした各地の団体を訪れては、あらたな学である民俗学へと誘っていた。小倉郷土会には、柳田の側近だった橋浦泰雄そして柳田本人が、九州での講演会や、当時「民間伝承の会」が企てていた山村調査の帰途に立ち寄った。杉浦の訪問も、そうした動きのひとつであった。

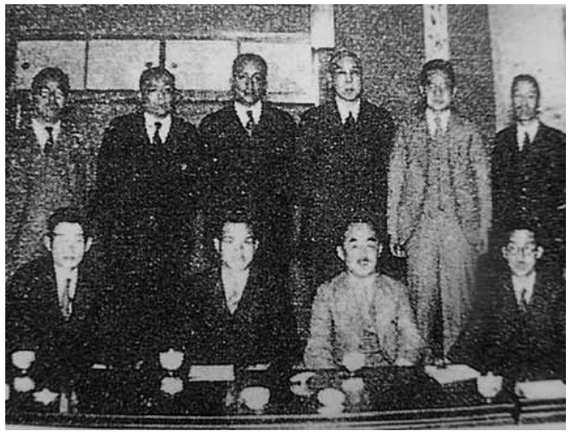
民俗学史は、こうした昭和初期の動向を、柳田が民俗学へと各地の郷土研究の団体を組織化していく過程として語る。

しかしわたしたちは、実際は、これらの在野の知は、そう簡単に民俗学になびいたわけではない、と考えている。例えば、小倉郷土会では柳田たちを大歓迎しながら、会としての実践そのものは、決して民俗学へ収斂したわけではなかった。その関心は文献資料を使った郷土の近世史、考古学、自然史、そして特に幕末期に長州軍との戦いで街が焼け野原になり多くの史資料が失われたことを埋め合わせるための古老への聞き書きなどに力が注がれていた。あくまでも民俗学は、彼らの活動の選択肢のひとつであった。

また郷土会の同人たちは、俳句や短歌の同人などにも同時に参加し、その活動は複数のジャンルにまたがり重層的であった。そして小倉郷土会は、福岡や豊前地方、下関などの団体とも活発なつながりがあったことが確認できる。そこからは、民俗学史が語る、柳田による中央集権的組織化の過程とは異なった様相が見えてくる。

柳田とその周辺は、各地の知の実践をひとつの中心にまとめ上げたというより、結果的に、運動を地域を越えて横につなげ、またあらたな知の刺激を橋渡しする媒介のひとつだったのではないだろうか。

今回の共同研究会は、特に各地の在野の知性に見られる多様なジャンルにまたがる横断性と、地域を越えるゆるやかな集団間のつながりのありように注目し、従来の学史の語りを相対化するとともに、在野の知がもっていたしなやかさを捉えなおすことを目指している。



柳田國男が小倉郷土会に立ち寄る。前列左から3人目が柳田國男。後列左から3人目が川崎英一、4人目が曽田共助。
馬渡博親 編『小倉郷土会のあゆみ』（2002）より転載

民博共同研究
「日本におけるネイティブ人類学／民俗学の成立と文化運動――1930年代から1960年代まで」
2010年10月～2013年3月
代表者：重信 幸彦

みんぱく Information

特別展

「彫刻家エル・アナツイのアフリカ ――アートと文化をめぐる旅」

ガーナ生まれでナイジェリア在住のエル・アナツイは、現代アフリカを代表する彫刻家です。木の彫刻や廃品を使った織物の作品で知られています。本展では、アナツイの作品とその文化的な背景をなぞっていきます。

会期　12月7日(火)まで
会場　特別展示館

企画展

「アジアの境界を越えて」

本展示は、東アジアにおける境界の認識や実態について古代（5世紀）と近現代（18～20世紀）を比較する試みです。古代では中国南朝や倭の出土品を、近現代の北方では諸民族集団の交易で伝えられた品や衣装・生業道具などを、南方では中国からタイへ移住した諸民族の銀製装身具や儀礼用具などを展示し境界について考えます。

会期　12月7日（火）まで
会場　本館展示場内

年末年始展示イベント

「うさぎ」

2011年の干支である「うさぎ」をテーマに、みんぱく収蔵の資料を中心に、世界各地の「うさぎ」にかかわる興味深い情報をパネルなどを使って、紹介いたします。年末年始の一日を、世界の人びとと「うさぎ」のつながりを知ることのできるみんぱくで過ごしてみませんか？

会期　12月16日(木)～2011年2月1日(火)
会場　本館展示場内

月にすむとされるウサギをあらわした玉兎（ぎょくと）。張り子人形 H0013154

「春のみんぱくフォーラム2011 ――ことばの世界へ」

情報をつたえ、感情をあらわし、ひとをつなげ、音をたのしむ。ことばにはさまざまな役割があります。そして音声、手話、文字など、それを伝え運ぶための顔も実に多様です。言語展示関連イベント、「春のみんぱくフォーラム2011――ことばの世界へ」では、このようなことばへの入口をいくつも用意しました。

会期　2011年1月8日(土)～3月31日(木)

◆公開講座

「ことばで世界一周」

世界各地のちょっとめずらしいことばの入門講座。みんぱくの教員が中心になり、90分で完結する講座を23言語で開催します。ぜひチャレンジしてみてください。

①「フィンランド語」1月9日（日）
②「ベトナム語」1月10日（月・祝）
　両日共に13時～14時30分
※1月16日以降も毎週末開催します。

申込方法

受講希望の方は言語講座名と開催日を明記し、お名前、所属、年齢、連絡先を左記のメールアドレスまでお送り下さい。
sekainokotoba@id.minpaku.ac.jp
受講希望講座ごとにお申し込みください。ことばについての予備知識は必要ありませんが、ローマ字が読める高校生以上のかたを対象とします。講座ごとに定員30名に達し次第、しめきります。

【研究部の新メンバー】

関本照夫特任教授（先端人類科学研究部）が、11月1日付けで着任しました。本館の機関研究「マテリアリティの人類学」において、研究プロジェクトをすすめる予定です。東京大学東洋文化研究所などを経て現職。専門は仕事の人類学、工芸と地域社会、東南アジア研究。著書は『国民文化が生れる時』など。

●アメリカ展示・オセアニア展示場の閉鎖

新しく生まれ変わるアメリカ・オセアニア展示場にご期待ください。
閉鎖期間　2011年3月下旬まで

●休館日・無料観覧日のお知らせ

年末年始は12月28日（火）から1月5日（水）まで休館します。
1月10日（月・祝）成人の日は本館展示を無料で観覧いただけます。ただし自然文化園を通行される場合、入園料が必要です。

みんぱくラジオ ～世界を語る～

みんぱくの研究者のお話をラジオでもお楽しみいただけます。
ラジオ大阪（1314kHz）
毎週水曜日　23時30分から24時

毎日新聞夕刊連載「旅・いろいろ地球人」

みんぱくの研究者のエッセイが毎週水曜日に掲載されています。

※詳細については、みんぱくホームページをご覧ください。

刊行物紹介

■鈴木七美・藤原久仁子・岩佐光広編著
『高齢者のウェルビーイングとライフデザインの協働』

御茶の水書房
定価：2,520円
高齢者の「幸福」という観点から、地域の歴史と特性を生かした調整や工夫の協働作業の経過を、フィールドワークに基づき提示した。

■『民博通信』2010　NO.129
評論・展望
みんぱく2010
――『民博通信』の改訂によせて

■『民博通信』2010　NO.130
評論・展望
フィールドワークにおける人間関係

■Min HAN/Nelson GRABURN　編
『Tourism and Glocalization: Perspectives on East Asian Societies』
Senri Ethnological Studies NO.76

みんぱくゼミナール

会場　国立民族学博物館 講堂
時間　13時30分～15時（13時開場）
定員　450名（当日先着順）
参加費　無料（展示をご覧になる方は、観覧料が必要です。）

第391回　12月18日(土)
バルカン商人と羊飼い――民族国家を求めなかったひとびと
講師　新免光比呂（民族文化研究部准教授）

近代国家形成以前、バルカン半島には縦横に移動する人々がいました。その名はヴラヒあるいはサラカチャン。彼らはもともと羊の移牧を生業としていましたが、やがてバルカン商人といわれる集団に加わります。そしてオスマン帝国とハプスブルク帝国の間をゆききし、莫大な富を蓄積しました。彼らは自分たちの民族国家をつくることにはこだわらず、それぞれ帰属する国家を拠点に活動しました。その知られざる暮らしと歴史をみてみましょう。

第392回　2011年1月15日(土)
【新言語展示関連】
みんぱくエスノローグ
講師　庄司博史（民族社会研究部教授）

世界的な言語データベースともいえるエスノローグは7000ものことばの話者数、分布、系統や地位などの情報を提供しています。今回、新言語展示では世界各地の言語を画面上で検索し、さまざまな情報を引き出せる装置を開発しました。公用語、民族語、手話なども含めた、みんぱくエスノローグを紹介します。

友の会

国立民族学博物館友の会　電話06-6877-8893（平日9時～17時）　FAX06-6878-3716
http://www.senri-f.or.jp/　　e-mail minpakutomo@senri-f.or.jp

東京講演会

会場　江戸東京博物館　学習室1
定員　50名（要申込）

第95回　2011年1月16日（日）14時～15時30分
ことばの歴史・ひとの移動史
講師　菊澤律子（民族文化研究部准教授）
語族という言い方を耳にしますが、ことばが同じグループに属するとはどういうことなのでしょうか。ことばの分類はなぜ、人の歴史と結びつくのでしょうか。「ことばの遺伝子」の分析と応用についてのお話です。

友の会講演会（大阪）

会場　国立民族学博物館　第5セミナー室
定員　96名（当日先着順、会員証提示）

第391回　1月8日（土）14時～15時30分
ことばの歴史・ひとの移動史
講師　菊澤律子（民族文化研究部准教授）

第392回　2月5日（土）14時～15時30分
日本におけるチベット研究のはじまり
――青木文教のたどった道
講師　長野泰彦（民族文化研究部教授）
仏典を求めてチベットに渡った青木文教は、ラサ市内で4年間を俗人として暮らしながら収集をすすめました。仏典だけでなく1910年頃の現地の人びとの生活についての映像資料など、さまざまなものを日本へもたらしました。民博に収蔵されている青木文教の資料や彼の生涯について紹介します。

第393回　3月5日（土）14時～15時30分
ジャワの芸能にみるマハーバーラタ
講師　福岡正太（文化資源研究センター准教授）

第77回民族学研修の旅
台湾東部の原住民族を訪ねる
――パイワン族・プユマ族の村へ
※詳細は上記「友の会」までお問い合わせください。

国立民族学博物館ミュージアム・ショップ

電話　06-6876-3112
FAX　06-6876-0875
e-mail shop@senri-f.or.jp
水曜日定休

ウェブサイトもご覧ください。
オンラインショップ
「World Wide Bazaar」
http://www.senri-f.or.jp/shop/

今年は「暖かさ」を贈り物に

今年の「クリスマスフェア」に新しい商品が並びます。ドイツからは、ツリーが普及する前のクリスマス飾りの主流だった「クリスマスピラミッド」。ろうそくの炎の上昇気流で上部のプロペラがゆっくりと回転し、中の飾りがぐるりと回っていきます。昨年人気だった愛らしいサンタ人形も新しいデザインが入荷しました。そのほか、エスニックな雰囲気を漂わせる刺しゅうが施されたモロッコの履き物・バブーシュ。贈り物には鹿革の手袋や木製ベルトが個性的な腕時計のほか、アルパカ衣料品がおすすめです。来年のカレンダーは刺しゅうを取り上げた美しい写真でご好評をいただいています。プレゼント選びにはぜひミュージアム・ショップをご利用ください。

クリスマスピラミッド	25,725円
腕時計	8,925円～
バブーシュ	3,150円～

三位一体型寺院
スワーミーナーラーヤン・アクシャルダム

山本 達也（やまもと たつや） 民博 外来研究員、京都大学文学研究科GCOE研究員

正面から見た寺院の姿

ギネスブックに載った寺院

ニューデリー駅からメトロで数駅、場違いなほど壮大な寺院スワーミーナーラーヤン・アクシャルダムが突如ヤムナー河畔にあらわれる。開祖とされるスワーミーナーラーヤンを崇（あが）めるためにヒンドゥー系教団BAPS（ボチャーサンワーシー・シュリー・アクシャル・プルショッタム・スワーミーナーラーヤン・サンスター）が二〇〇五年に建立したその寺院は、世界最大のヒンドゥー寺院としてギネスブックに掲載されている。ただ、この寺院の特徴はそこに限定されない。むしろこの寺院の特徴は、積極参加型の展示にあるといえる。

展示場としての寺院

まず、スワーミーナーラーヤンの像が設（しつら）えられた聖堂の階上に、スワーミーナーラーヤンの衣類や道具、さらに爪や頭髪、遺灰にいたるさまざまな遺品が詳細な解説つきで展示されている。観賞を経たうえで参拝者が誘われるのは、スワーミーナーラーヤンの人生をなぞるアトラクションである。ここで、幼少期から彼がもたらした奇跡を参加者は追体験し、また、そこかしこに教団の理念が掲示されている。

さらに、四万五〇〇〇人を動員し、スワーミーナーラーヤンがインド各地でみせた奇跡を描いた壮大な映画へと順路は続く。この映画で体験するインドが空間的な広がりであるならば、次に参加者が導かれるのは、ボート・ライドで学ぶ一万年にもおよぶインドの時間的な広がり、すなわち歴史である。そこでわたしが見たインドの歴史はヒンドゥーに特化したものであり、そこからムガル帝国など、イスラーム的な歴史は見事に排除されていた。こうしたアトラクションへの参加は約三時間にもおよび、さらに、ナイト・ショーではUSJ顔負けの光と音のショーが開催される。

ヒンドゥー・ナショナリズムとのダブリング

寺院への参拝者は、わたしをのぞけばヒンドゥー教徒であっただろう。彼らにとって娯楽を伴った積極参加型の展示は、物珍しさもあって魅力的だったに違いない。しきりに歓喜や驚嘆の声が聞かれたし、次のアトラクションに人びとは我先に、と押しよせていた。もちろん、彼らが展示に没入したか否かは知る由もないが、ヒンドゥー寺院における博物館的展示とテーマ・パークの融合が提示するメッセージは、ヒンドゥー・ナショナリズムという現代インドを覆う情勢と軌を一にしているように思えてならない。

寺院の公式グッズ

駅構内に掲示される寺院の広告

みんぱく 私の逸品

『夷酋列像図』

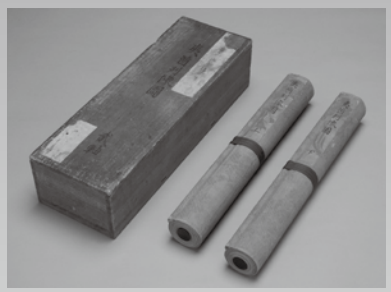
民博 民族社会研究部 佐々木 史郎

図書資料番号 F1040071177
地域 F1040111165 日本国

本館の図書室には『夷酋列像図』と称する資料がある。これは一二人のアイヌの有力者をモデルにした人物画で、一八世紀末に松前藩の家老だった蠣崎波響という画家が描いた『夷酋列像』の写本のひとつである。絵の質としては原画の『夷酋列像』には及ばないが、この写本の価値は、筆頭老中として寛政の改革をおこない、一七九二(寛政四)年のロシア使節の根室来航にも対応した松平定信が所持していたと伝えられている点にある。定信は老中在任中は蝦夷地の経営に消極的だったといわれるが、このような写本を所持していたとすると、北方に対する情報収集は怠りなかったようである。

原本の『夷酋列像』は、一七八九(寛政元)年に起きたクナシリ・メナシの戦いと関係が深い。一八世紀後半、現在の北海道東部(メナシ地方)とクナシリ島のアイヌたちは、そこに進出した飛騨屋に雇われた和人たちからひどい搾取と無法な扱いを受けていた。それに堪えかねた一部の人びとがこの年に武装蜂起し、和人側に七一人の犠牲者が出た。松前藩は鎮圧部隊を送ったが、アイヌ側は長老たちが蜂起した者の説得に当たり、結局全員投降した後、松前藩の命令で首謀格とされた三七名が処刑された。松前側は長老たちを松前城下に連れてきて藩への服従を誓わせたが、さらに彼らをモデルにした人物画を蠣崎波響に描かせたのである。

この絵は実際の人物を写した肖像画ではない。当時の人物画の技法を使い、蝦夷錦やロシア外套を着せて、アイヌの異人性を際だたせるように描かれている。製作直後からアイヌ人物画の傑作として高く評価されて、数多くの写本、模本が作られ、いわば松前藩の広報役を演じた。しかし、描かれた人物にじっと目をこらすと、その奥から虐げられてきた人びとの悲しげな声が聞こえてくる気がしてならない。



関連企画展のお知らせ

アジアの境界を越えて
会期：12月7日（火）まで開催中
会場：国立民族学博物館企画展示場A

ながい歴史のなかで、アジアには、国がもうけた境界や人びとの活動にあらわれた境界などさまざまな「境界」を見出すことができます。古代と近現代を比較することで、境界の姿を映し出すとともに、現代において境界のもつ意味を考える場を提供することができれば幸いです。

散策と思索の径

「闇の聖地」で、音に触る

廣瀬浩二郎
民博 民族文化研究部

九月一一日、京都の鞍馬寺で開催された清虚洞一絃琴の演奏会に解説者として参加した。

僕は大学・大学院で日本史を専攻していたが、芸能史の研究者ではないし、一絃琴はもちろん、邦楽とは縁のない日々を送っている。

そんな僕になぜ解説役の依頼があったのか。

鞍馬寺の一絃琴演奏会にて

鞍馬寺仁王門
『百の義経』（鞍馬寺出版部）より転載

義経堂
『百の義経』（鞍馬寺出版部）より転載

闇という装置を活用する

ここ数年、僕は「闇の仕掛け人」と自称して、さまざまな暗闇体験イベントをおこなっている。昨年三月には津軽三味線の暗闇ライブを企画し、演奏を盛り上げる文字どおりの口三味線役で出演した。僕が暗闇イベントを実施する際のキーワードは〝耕す〟と〝触る〟のふたつである。現代人の日常生活は視覚情報に支配されている。その便利な視覚を使えない（使わない）闇に身を置いてはじめて、多くの人が自己の潜在能力、視覚以外の五感の可能性に気づく。この「感覚の多様性」を呼び覚ます行為を僕は〝耕す〟と名づけている。

人間の五感のなかで僕がもっとも重視するのは触覚である。皮膚感覚という語が示すように、触覚は全身に分布している。音楽を鑑賞する場合も、単に耳で聴くだけでなく、身体を駆使して音を肌でとらえる。これは「音に触る」ともいえるだろう。普段僕たちが依拠している視覚を離れ、〝耕す〟と〝触る〟に集中する。そのための装置として闇を積極的に活用するのが僕の狙いである。

鞍馬山は闇の霊山である

そんなわけで「闇の仕掛け人」は鞍馬山の演奏会でも闇の広さと深さを縦横に（好き勝手に？）語った。近年、鞍馬山はパワースポットとして注目されているが、歴史を振り返ってみると「闇の聖地」であったことがわかる。華やかな都、平安京の北方に位置する鞍馬は、光を際立たせる闇の役割を果たしてきた。無論、ここでいう闇とは否定的なものではなく、光を生み育てるエネルギーの源泉という意味である。合気道の開祖・植芝盛平（一八八三～一九六九）は、深夜の鞍馬山の闇のなかで真剣を用いた稽古を繰り返し、合気の極意を会得した。まさに視覚を使わない闇が独自の武道技法を発展させたといえよう。

鞍馬山といえば、源義経が幼少年期を過ごした地としても知られている。義経は日本史を代表する英雄の一人だが、その歴史的評価は多種多様である。僕は一九八〇～九〇年代に京都大学で日本史を学習した。入学直後に受けた中世史の講義は、カルチャーショックの連続だった。源平合戦の位置づけ、公家と武家の関係など、高校までの教科書で常識とされていた歴史は、鎌倉幕府の正史『吾妻鏡』に基づく東国中心の史観であることを再認識した。京都の王権に近い史料、摂政・関白を歴任した九条兼実の日記『玉葉』などを尊重すれば、おのずと歴史解釈は異なったものとなる。平氏滅亡後の義経の急激な没落についても、伝統的に東と西では見解が相違している。

ここで義経論に深入りするつもりはないが、いずれにしても現実の政治（光）の世界で義経は頼朝に敗れ、目に見えない闇の領域で生き続けることになる。日本人の想像力と創造力により幾多の義経伝説が生成され、彼は反権力のヒーローとして絶大な人気を勝ちえていく。義経の人格形成のルーツに鞍馬山の闇があったことは、単なる偶然ではないだろう。

心の闇を掘り起こす一絃琴

今回の一絃琴演奏会は、毎年九月に開かれる義経祭の奉賛イベントとして催された。義経が実際に体感した鞍馬の「氣」に包まれながら、僕は闇の現代的意義を考えた。一絃琴は江戸後期、国学・復古思想が流行するなかで、精神性を重んじる楽器として各地に普及した。琴の形を複雑にするのでなく、あえて一本の絃にこだわる。シンプルで透明な絃の響きは、人間の心の闇、感覚の多様性を掘り起こす力を秘めている。心を静め琴の音、そして鞍馬の自然の声に〝触る〟。僕の口三味線（解説）は邪魔だったかもしれないが、澄み切った一絃琴の調べは来場者個々の闇を〝耕す〟大いなる刺激となったようだ。

暗闇ライブ案内のチラシ（部分）

清虚洞メンバーによる一絃琴演奏

多文化をささえる人びと

すべてのひとに文字とことばをふたたび——夜間中学の今

学歴社会といわれる日本で、かつて貧困や労働、障がい、あるいはいじめなどで学校にいけず、
文字をしらない苦しみを背負いながら生きてきた人は一説では100万人以上といわれる。
彼らにとって、夜間中学は、文字への希望をよみがえらせ、人生の失った数十年を取り戻すかけがえのない場を提供してきた。
戦後まもなく活動をはじめた夜間中学は、今また、あらたな希望と生きがいの場として注目されている。

庄司 博史（しょうじ ひろし）
民博 民族社会研究部

夜間中学での学び

クラスによっては生徒の大半は在日コリアンの高齢者がしめる。戦中戦後の学齢期に学校にかよえず、文字を学ぶ機会を失った人びとである。そして今まで文字であふれる社会に生きてきた。電車やバスの切符が買えないため一人で遠出もできず、子どもの学校からの書類もわからずにさんざん文字を知らない苦労と不便にもたえてきた。そして、子どもが自立し、仕事から解放された今、ようやく、あこがれの文字にはじめてふれる機会ができた。それも正式の学校の生徒として。今では生徒手帳をもって、望めば学割の定期で通学も可能になった。

日本語学習に力点がおかれているとはいえ、授業科目には昼間の中学同様、社会や数学の授業、そして保健、体育や音楽もふくまれる。補食とよばれるが、簡単な給食の時間ももうけられ、秋には文化祭、春には遠足にも参加できる。同じ経験をもつひとに囲まれ、誰にも遠慮せず、なんでもいえる雰囲気のなかで、経験しえなかった学校生活を取り戻そうとする生徒たちと周囲の努力が学校全体で感じられる。

しかし、最高のよろこびはやはり、文字を学び、社会とのつながりができた達成感だ。はじめて自分の名が書け、看板の一文字が読めるようになった感激はおそらく本人しかわからないだろう。「文字とことばは武器」、「夜間学校で社会のことがわかりました」、廊下で目にした作文や標語は彼らの文字や学ぶことへのあつい思いをあらわしたものであった。

守口夜間中学の生徒たち

大阪守口（もりぐち）市、京阪電鉄土居（どい）駅のすぐ近く、典型的な大阪の民家と商店の入り混じった住宅地の一角にいわゆる守口夜間中学がある。正式名称は守口市立第三中学校夜間学級。れっきとした公立中学である。門をくぐり案内された校舎の二階に靴をぬいではいったとたん、思いがけない光景が目にとびこんでくる。

廊下の壁と教室の窓ガラスはほとんど隙間のないほど生徒の作文や標語、ポスターやイベントの写真でうめつくされている。ほとんどの日本語の漢字にはルビがふられているかとおもえば、中国語簡体字もハングルもみえる。

会釈をしながらすぐ近くの教室にうしろからそっとはいる。一〇人ほどの生徒は、中学生というにはちょっと不釣り合いな六〇歳前後の男女が大半、いやほとんどをしめる。なかには二、三〇代の若い女性とともに八〇歳近いと思われる女性もいる。学校の主旨からある程度心づもりをしていてもこの印象は強烈だ。

それだけでない。生徒たちが読んでいるのは、ひらがなと少し漢字の混じった教科書。おそらく一般の小学校なら二、三年生のレベルだろうか。読む順にあたった高齢の女性が、ゆっくり指で文字をたどりながら読みはじめる。まちがっても生徒はひるまない。いくつかの当てずっぽうかな？とも思える読みが続いたあと、教師が助け船を出す。さらに生徒とのかけあいをまじえながら授業は和やかに進む。

夜間中学の役割

白井善吾さんは守口夜間中学に勤めて二〇年のベテランである。ずっと理科を担当してきたが、他の教師同様、通学や学習についてはもちろん、自分とは同輩以上の生徒のあらゆる相談にものってきた、彼らにとっては、単なる教師以上のたよりになる存在である。

着任当時、すでに夜間中学は在日コリアンの学びの場としてあったが、それ以降も夜間中学の変容と存在意義を白井さんはつぶさに見てきた。

夜間中学は終戦直後、昼間の中学にかよえない生徒に学習の機会を保障する目的で一九四七年設立された。一時は全国に八七校も存在し、五二〇八人もの生徒がかよっていたという。その後、一九六五年の日韓条約を契機に韓国からの引揚女性にとって断絶していた日本社会復帰のための学びの場となり、さらにそれがきっかけで在日コリアン女性が文字を獲得するための場として開放された。いずれも、戦中から戦後にかけて、教育をうけられず、文字をしらずにいきる苦しみをあじわった人びとである。

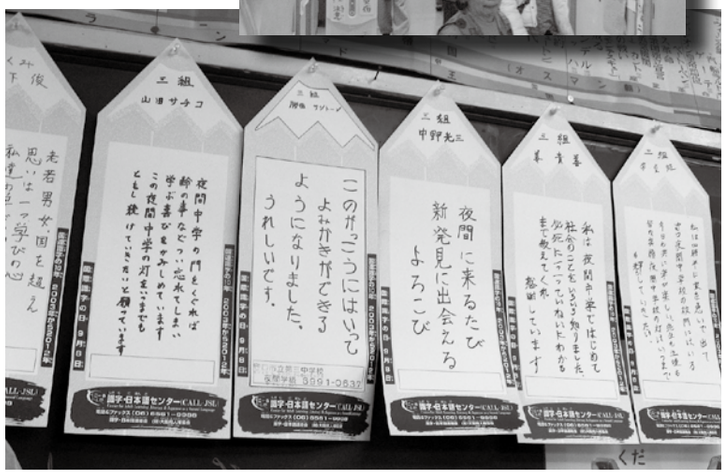
そして今、夜間中学は、中国引揚帰国者、呼び寄せ家族、日本人と結婚した女性たちにとって、日本語と日本社会で生活するための知識を獲得する場として存在意義を強めているという。守口夜間中学では今、中国帰国者が全校生徒一五〇人の三分の二近くをしめるようになった。彼らの学習欲は旺盛で、働きながらも夜間学校にかよい新聞の社説を読むレベルに達する人もいる。

現在、日本全国には三五校の夜間中学、約二〇校のボランティアによる自主夜間中学がある。夜間中学を必要とする人びとがまだまだ日本にはいるということの証しだと白井さんはいう。今、白井さんには大いに気がかりなことがある。財政難から夜間中学への自治体の就学援助がカットされはじめ、大阪府や政府からは修業年限の短縮や就学条件の厳格化をはかろうとする動きがみられることだ。学ぼうとするひとがいるということこそ社会にとっては歓迎すべきことだと思うのだが。廊下で見た標語のひとつ「学びの場を奪わないで」の意味がようやくわかった気がした。

各クラス合同の保健の授業

廊下にはられた生徒たちの訴え。従来あった補食給食は2009年4月より大阪府補助がなくなり中止されている

夜間中学の廊下。さまざまな文化・ことばの交差点である



生徒たちの夜間中学へのおもいが文字になった

CALENDAR 十二月 第33回

歳時世相篇

「世界最大」の音楽シーズン

南インド古典音楽の中心地チェンナイ。
ここでは、シーズン中、一日に四〇以上の公演が開かれ、
その規模はインド最大だ。
成立の背景にナショナリズムがかかわっていたこのイベントにも、
近年はグローバル化の波が押し寄せている

寺田吉孝
民博 民族文化研究部

冬の風物詩

インド南東部にある港町チェンナイ（旧マドラス）は、一九世紀の終わりごろに南インド古典音楽の中心地となり、現在でも数多くの著名演奏家がこの町に住んでいる。一年を通して一流演奏家の音楽を聴くことができるが、毎年一二月になると町全体が音楽で溢れでんばかりの状態になる。インドで最大規模の音楽イベントが開かれるからだ。

南インドの古典音楽の公演は、おもに会員制の音楽協会（サンギータ・サバー）によって企画・運営されており、チェンナイ市内にある五〇ほどの協会が、タミル暦のマールガリ月（一二月～一月）に一斉に音楽祭を開くのだ。南インド古典音楽・舞踊の公演が中心だが、午前中には講演やワークショップなども開かれる。この一大イベントは「音楽シーズン」の名称で親しまれており、まさにチェンナイの冬の風物詩となっている。毎年、一二月一日づけの朝刊に音楽祭のプログラムが掲載されるので、その日の朝、贔屓の演奏家の公演日程をチェックするのはファンにとって大きな楽しみだ。

イギリスに対抗する音楽

音楽シーズンが開かれるマールガリ月は、一年中で一番涼しく過ごしやすい時期である。また、結婚式などおめでたい行事には不向きであるとされているので、公演の日程が組みやすいという利点もある。しかし、この時期に開催されるようになったのは、それだけが理由ではなかったようだ。

一九二八年にマドラス音楽院（ミュージック・アカデミー）が設立され、その年開かれた音楽祭が、チェンナイの音楽シーズンの始まりだといわれている。一九四七年の独立まで続く植民地時代には、イギリス人たちが毎年クリスマス休暇に合わせてヨーロッパ音楽の演奏会を開いており、同じ時期にインド音楽の演奏会を開くことは、それに対抗する意図があったという。永劫不変のイメージをもつインド音楽も、その成立の背景には、植民地の経験とナショナリズムが深く関係しているのだ。

インド最大の音楽イベント

音楽舞踊の専門誌『シュルティ』によると、二〇〇五年のシーズン中に開催された公演数は約二五〇〇。会期を二カ月とすると、一日当たり四〇以上の公演が開かれた計算になる。これだけを見ても、いかに莫大なエネルギーが音楽と舞踊に費やされているかがわかるだろう。「公演が多すぎて選ぶのが大変」とこぼすファンもいるが、まさに贅沢な悩みだ。出来るだけ多くの公演を見るために、早朝から晩まで会場のハシゴをするものも多い。大きな会場のわきには簡易食堂（カンティーン）が設けられ、演奏の合間に喫茶や軽食を楽しむことができる。同好の士が見たばかりの公演を肴におしゃべりする姿があちこちで見られる。ここでは、憧れの音楽家にばったり出会う可能性さえあるのだ。

北米在住のNRI演奏家たちによるコンサート（2009年）

グローバル化する音楽シーズン

音楽シーズンを楽しみにしているのは、地元のチェンナイ市民だけではない。遠方からの参加者も年々増加している。ここ二〇年ほどのあいだに、北インドに住む南インド出身者たちに加え、NRI（Non-Resident Indians）とよばれる海外在住のインド系の姿が目立つようになった。海外で南インド音楽や舞踊を学ぶ二世の若者たちが多くなるにつれて、演奏家として公演をおこなうことを希望する者も増加の一途をたどっている。このような国外からの需要に対応するかのように、一九九〇年代半ばにはおもにNRIの演奏家が出演する音楽祭を開催する協会さえあらわれた。

一昨年、このような協会の役員の自宅を訪ねたことがある。一時間ほどの滞在中に、マレーシア、北米、イギリス、オーストラリアなど世界各地から、問い合わせの電話が次々と入り、チェンナイを中心として音楽のグローバルなネットワークが存在することを実感することができた。

インターネットで学ぶ音楽

昨年のシーズン中に見た演奏会は、音楽のグローバル化がさらに進行することを予想させるに十分だ。舞台に上がった若い演奏家たちは、全員が北米で生まれ育った南インド系二世たち。驚いたことに、北米各地に住む彼らは、チェンナイに住む同じ師匠からインターネットを使って個別に稽古をつけてもらっている。今回の公演のために来印し、数日前のリハーサルで初めて顔を合わせたそうだ。一般の観客はすくなく聴衆のほとんどは彼らの親戚や友人たちだ。熱心に写真やビデオをとっている者も多い。入場も無料で公演というよりは発表会の雰囲気に近いが、彼らにとっては南インド古典音楽のメッカであるチェンナイの音楽シーズンで演奏したという事実が重要である。

このようなNRIの存在は、音楽シーズンに大きな影響を及ぼし始めている。海外での演奏経験をもつ一流演奏家たちのギャラはあがる一方であり、諸物価の高騰も手伝って、資金繰りに苦しむ音楽協会は少なくない。「海外の同胞を支援する」「音楽に国境はない」といった音楽協会の公の見解を疑わないにせよ、多額の寄付や謝礼が見込めるNRIに対する期待感が存在することも否定できないだろう。演奏の機会を「買う」NRIの進出は音楽の質の低下につながるという批判は根強いが、彼らの存在はチェンナイの音楽界でも一定の地位を築きつつあるようだ。

フィールドで考える

泥のモスクはだれのもの

伊東 未来
大阪大学大学院博士後期課程

「泥の町」ジェンネ

西アフリカの内陸部に、「泥の町」がある。アフリカ第三の大河ニジェール河の支流に囲まれた、マリ共和国のジェンネという古都だ。一平方キロメートルに満たない小さな町に、およそ一万四〇〇〇人の人びとが暮らしている。わたしはこの町に二年間暮らし、人類学の調査をおこなった。

ジェンネが「泥の町」とよばれるゆえんは、特有の建築にある。町のすべての建物が泥でできているのだ。正確にいうと、泥を乾かしてつくった日干しレンガを積み重ね、その表面を泥で化粧塗りした建築である。

町の人びと自慢の大モスク

ジェンネは一五世紀ごろから、西アフリカの中心的なイスラーム学術都市のひとつとして重要な役割をになってきた。ジェンネの町の中心には、大モスクが建っている。縦横およそ七五メートル、高さ二〇メートル。世界最大の泥の建築物だ。町で唯一のこの大モスクは、ジェンネ・ボロ（ジェンネっ子）の誇りである。人びとはことあるごとに、じぶんたちのモスクの壮麗さを自慢する。

ジェンネの建物を包んでいる泥の化粧塗りは、雨季のはげしい雨で少しずつ流されてしまう。そのため、雨季のまえには建物の化粧塗りをしなおす必要がある。巨大なモスクも例外ではない。大モスクは毎年、住民総出で化粧なおしをされる。これは町の人びとにとって一年でいちばんにぎやかな祭りであり、礼拝をおこなう大切な場を町の皆で守っていく、厳かなおこないでもある。

モスクの化粧なおしのようす（２００７年４月）

大モスクの化粧なおし

炎天下に高所でおこなう化粧なおしは体力勝負の作業。祭りの実働部隊の中心は、一〇代から三〇代前半の若い男性だ。同年代の女性は、塗りなおすための泥が乾かないよう、川からバケツで水を運ぶ。年長者は、祭りが無事におこなわれるよう見守り、若者を監督する。

当日、祭りは日の出とともに始まる。まだ薄暗いなか、泥大工の最年長者が、メッカの方角を向いたキブラ壁に最初のひと塗りをする。それを合図に、若者がいっせいにモスクに駆け登り、泥を塗りはじめる。子どもから大人まで、歓声をあげる。巨大なモスクの外壁、内壁、屋上すべての化粧なおしだが、およそ半日の早さで完了する。

モスクの壁にはりついて全身で泥を塗りなおす若い人びとの姿は、いつも町を見守ってくれるお母さんに甘える子どものようだ。それを見つめる年長者のまなざしもとても満足げ。人びとの信仰の深さとモスクへの愛着を強く感じる、すてきな祭りである。

ジェンネっ子のモスク／世界全体の遺産

このように、住民総出で毎年盛大におこなわれてきたモスクの化粧なおしだが、二〇〇九年の様相はすこし違っていた。あきらかに盛りあがりに欠けたのだ。直前まで、今年はやらないほうがよいという意見も強く、当日に参加をボイコットする人も目立った。これは、二〇〇八年末に着工された、外部団体によるモスク改修プロジェクトの影響である。

いたみが目立ってきたジェンネのモスクを改修しようと、行政の側が外国の支援団体に依頼し、改修プロジェクトがはじまった。住民はじぶんたちのモスクが若返るのはうれしいと考えながらも、「よそ者」である首都の役人や外国人がとりしきる改修プロジェクトの進めかたには、強い不満をいだいていた。二〇〇六年九月にはこれに関連した暴動もおき、逮捕者やけが人も多数でたという。ふだんの、静かでどこかツンと澄ました古都の風情ただようジェンネからは、なかなか想像ができない事態だ。

ジェンネのモスクは、町の人びとがそこで祈り、それを守り、またその存在に守られてきた、「ジェンネっ子の」モスクだった。しかし、外部の支援組織による改修プロジェクトは、モスク＝世界遺産という認識のもとでおこなわれている。つまりモスクは、「国境を越え今日に生きる世界のすべての人びとが共有し、次の世代に受け継いでいくべき」世界全体の遺産として扱われているのだ。

盛りあがりに欠ける化粧なおしを、モスク前の広場からながめていた。わたしの隣で、今は引退した泥大工のおじいさんが、ぼそっと言った。「次の年、その次の年、はたしてわたしたちは、じぶんたちのモスクの化粧なおしを、じぶんたちの手でできるのだろうか。モスクがだんだんと、よそ者のものになっていくようだね」。

今後この改修プロジェクトが終われば、ジェンネのモスクはまたジェンネっ子の手に戻るのだろうか。それとも、このままどんどん、「世界遺産になって」いくのだろうか。

男の子は１０歳くらいになると化粧なおしに参加するようになる（２００７年４月）

毎週月曜日にモスク前の広場でひらかれる定期市（２００８年１月）

12月

みんぱくウィークエンド・サロン

研究者と話そう

■時間　14 時 30 分から 15 時 30 分（予定）
■展示観覧料が必要です。
※都合により、予定を変更することがあります。

国立民族学博物館（みんぱく）の研究者が来館された皆様の前に登場します！
「研究について」「調査している地域（国）の最新情報」「展示資料について」などなど、話題や内容は千差万別！
どんどん質問もおよせください。展示場でお待ちしております。

5日（日曜日）
話者：福岡正太（文化資源研究センター准教授）
話題：西ジャワの作曲家～ナノ・S.
場所：本館展示場内ナビひろば

12日（日曜日）
話者：寺田吉孝（民族文化研究部教授）
話題：南インドの音楽とグローバル化
場所：本館展示場内ナビひろば

19日（日曜日）
話者：小林繁樹（文化資源研究センター教授）
話題：【年末年始展示イベント「うさぎ」関連】
年末年始展示イベント「うさぎ」と職員研修会
場所：企画展示場Ｂ入口

26日（日曜日）
話者：ピーター・J・マシウス（民族社会研究部准教授）
話題：展示場で民族植物学の旅に出よう：食糧、食糧の確保、冬のごちそう
場所：本館展示入口

1年間みんぱくに何度でも入館できる「みんぱくフリーパス（3,000円）」をご利用ください。

本館展示は何度でも無料で入館できます。他にも、みんぱくを楽しむための特典がいっぱいです。

特典◆本館展示の無料入館◆特別展示の観覧料割引
◆みんぱくミュージアム・ショップとレストランの10%割引
◆万博記念公園内および周辺施設での利用割引　など。
詳細については、財団法人千里文化財団までお問い合わせください。
（電話06－6877－8893／平日9：00～17：00）

編集後記

「国際生物多様性年」の本年、COP10はビジネス上の南北問題を浮き彫りにした。生物多様性は、生態系、種、ある種内での遺伝子、3点での多様性を指すが、最後が本号の特集にかかわる。品種改良とはヒトに都合の良い遺伝子の固定化、すなわち遺伝子の多様性を減じる行為だ。遺伝子多様性の保持と品種改良のバランスの難しさは、万年氏の論のとおりだし、品種を文化財として残すことで種全体の遺伝子多様性を保持する試みが小宮氏の論である。

自然界では各地域環境に適応した固有種、いわば品種が生まれる。これに関して在来種と人為的な移入種との交雑問題を思いだす。固有種を守るとして交雑種の駆除が唱えられるが、交雑は遺伝子多様性を増やすから喜ぶべきとの論もある。人為的行為の是正も駆除の論拠のひとつだが、地球史の永い目で見ればヒトの存在自体も生態系の一部、人為を是正しようと人為を重ねても詮無（せんな）いこと、生物進化は自然に任せるほかないか。という訳で、わたしにとって生物多様性の問題はクリアーでない。読者諸賢はどのようにお考えだろうか。（久保正敏）

●表紙：川を泳ぐブタ。バングラデシュの人口のおよそ9割はムスリムであり、ブタを忌み嫌っている。しかし、国内を広くまわると各地でブタの群れをつれている人びとに出会う。水の豊かなデルタにおいて、ブタもまた水に適応しているようにみえる。（撮影・池谷和信）

次号の予告

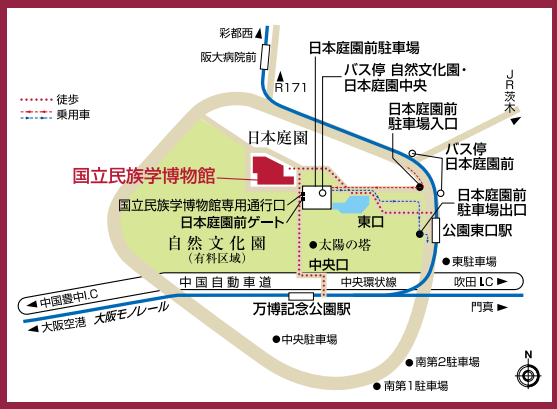
特集
ウサギ

月刊みんぱく　2010 年 12 月号
第 34 巻第 12 号通巻第 399 号　2010 年 12 月 1 日発行

編集・発行　人間文化研究機構 国立民族学博物館
〒565-8511 大阪府吹田市千里万博公園 10-1
電話　06-6876-2151

発行人　西尾哲夫
編集委員　久保正敏（編集長）　朝倉敏夫　樫永真佐夫　庄司博史　中牧弘允　山中由里子
編集アドバイザー　山内直樹
デザイン　宮谷一款
制作・協力　財団法人 千里文化財団
印刷　日本写真印刷株式会社

＊本誌についてのお問い合わせは国立民族学博物館広報係にお願いします。
＊本誌掲載記事の無断転載を禁じます。



交通案内
●大阪モノレール「万博記念公園駅」・「公園東口駅」下車、徒歩約15分
●阪急茨木市駅・JR茨木駅・北大阪急行千里中央駅からバスで「日本庭園前」下車、徒歩約15分（茨木方面からは、もっとも近い「自然文化園・日本庭園中央」バス停で下車できるバスが1時間に1本程度あります。詳しくは阪急バスにお問い合わせください）。
●自家用車は、公園内の「日本庭園前駐車場」（有料）から徒歩約5分。「日本庭園前ゲート」横にある民博専用通行口をお通りください。
●タクシーは、万博記念公園「日本庭園前駐車場」まで乗り入れできます。

みんぱくホームページ
http://www.minpaku.ac.jp/